

嘗てのビルマ戦線で戦った 日本将兵を想う

— その1 —

日・緬の絆とビルマ独立義勇軍

高松重信・著



ミャンマーの人々の心の故郷“シュエダゴン・パゴダ”（2023.11.22 筆者撮影）



日緬ライブラリー・パダウ

PADAUK

前文 / 先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）

（一社）日本ミャンマー友好協会・副会長 高松重信

戦争とは人類が最も忌避すべき残虐な事変である。従って我々は最大限の努力をもって、その戦争を回避しなければならない。

しかしながら、世界の歴史に於いて戦火が絶えることはない。現状下に於いてはイスラエル・パレスティナ紛争、ロシア・ウクライナ戦争などと悲惨な戦いで多くの人命が失われている。また、中国と台湾、南シナ海、中近東などの地域では一触即発の危険性を孕んでいる。

プロイセンの将軍カール・フォン・クラウゼヴィッツは「戦争」を自身の著書「戦争論（Vom Kriege）」の中で次の様に定義付けている。

「戦争とは、敵を強制してわれわれの意志を遂行させるために用いられる暴力行為である」
即ち、双方が武器を有した暴力行為であるから、双方の将兵及び市民に人的損傷が必ず生ずることになる。

特に戦う将兵にとっては必ず自らの人命を投げ出す覚悟をしなければならない。つまり人間にとっては誠に苦しい状況下に於かれるから、一人一人の将兵にとっては極めて赤裸々な個人的な人間像を呈することになる。

我が国の国策により先の大戦中、遠い異国のビルマ戦線に派遣された日本将兵方々が過酷な戦いの中で、如何なる生き方を示していたかを我々日本人は知り、畏敬の念を払うと同時に、我々が今後進むべき人生観の道標にすべきと思う次第である。

他方、第二次大戦は確かに、我国はアジア諸国を中心にして、その惨禍を被らせたことにお詫びと反省をしなければならない。二度と我々日本人は過ちを犯してはならないことを肝に銘じ、今後の我が国の若人に申し伝えねばならない。

しかし、自虐的な書物及び報道によって、第二次大戦に対して日本が果たした世界史的な役割も、また見失ってはならない。私は、平和共存を前提にして、いま、この旗を建てるため、我々日本人が如何なる働きをしたかを聞かされるならば、我が民族は必ずや、再び、失われた自信を取戻し、胸を張って、新しい人類の理想のために前進するのではないかと思う。

当一般社団法人日本ミャンマー友好協会は、1970年、ビルマ戦線から帰国された方々が設立した団体である。先の大戦中、ビルマには約30万人の日本将兵方々が派遣され、遠い彼の地で日本の両親兄弟及び人々の為に渾身の力を絞り勇戦されたが、戦い利にあらず、その内の約18万人の方々が戦病死され、未だその遺骨の多くは帰還されていない。我々は彼らに対して感謝もせず、慰霊もせず、ただ忘れるばかりの日本人であって良いのだろうかと思うことしばしばである。

この意味も含めて、日本将兵方々が、あの過酷なビルマ戦線で如何に戦われたかを我々は知り、それらの人々の遺功に報じなければならないと思う次第です。

以上の観点で、（一社）日本ミャンマー友好協会の「日緬ライブラリー・パダウ」に先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）と題して、拙文を登録させて頂いた次第である。

登録させて頂いた拙文は戦記的な興味本位でなく、悲惨な戦場で戦った日本将兵の本義（人生観）と言う角度で記述致している。読者の方々に於かれては是非とも一読して頂き、些少とも御参考に為りますれば、幸甚に存じます。



ミャンマー連邦共和国



はじめに

● 1982年ミャンマー国鉄 Yawataung 工場



Yawataung 工場の本館 1982年7月

少々、古い話で恐縮であるが、今から34年前、私は旧日本国有鉄道から1982年（昭和57年）6月下旬、JICAベースで鉄道技術指導のためにビルマ（現ミャンマー）国鉄へ派遣された。マンダレー近郊イラワジ川に架けられた有名なアバの鉄橋を渡ったSagaing（サガイン）地区にあるYawataung（ヨートン）工場ディーゼル機関車の修繕技術指導を行っていた。

ある日の早朝、工場2階の一室で一腹していたおり、屋外で「キオツケ、レイ」の号令声を聞いた。複数の日本人が来ているのだろうかと思議に思ったので、窓から身を乗り出してみても見ると、Yawataung工場の数多い訓練生が朝の点呼を行っていた。驚いたことに、何と号令は日本語で行われていた。

一体何故、ミャンマー国鉄訓練生が日本語の号令を使用していたのであろうか。

● ミャンマー国軍の軍艦マーチ

ミャンマーの首都Nay Pyi Tawの郊外に広大な軍事博物館が建設されている。過日（2014年1月）、見学に行ったところ、今から119年前に瀬戸口藤吉氏が作曲した世界的な名曲である我が国の「軍艦行進曲（マーチ）」が流れているのではないかと。言語は緬国語で歌われているが確かに軍艦マーチであった。

ミャンマーではこれを《ミャンマー国軍の行進曲 (Myanmar Nation's Armed March “Myanmar Tatmadaw”)》として歌われている。何故に、ミャンマーで我が国の軍艦マーチがMyanmar Tatmadawとして歌われるのであろうか？

● ミャンマー国軍最高司令官の来日



2014年9月25日麻生副総理との会談（左端の軍服姿）

2014年9月23日、ミャンマー国軍最高司令官ミン・アウン・ライン官 (Senior General Min Aung Hlaing, Commander-in-Chief of Defence Services) 上級大将夫妻を代表とするミャンマー国軍代表団が、自衛隊の岩崎茂統合幕僚長の招きにより、28日までの日程で日本を公式訪問された。

ミン・アウン・ライン最高司令官は、今は亡き鈴木敬司陸軍大佐（当時）の墓参と旧宅を訪問された。当時のミャンマー大統領と国家の権力を2分するミャンマーの最高司令官が何故、故鈴木（旧日本陸軍）少将宅へ敬意と慰霊法要をされたのであろうか。

● 我が国とミャンマーとの強い絆

何れの国家に於いても『独立』は何物にも代え難い『国家存立の根幹』である。しかしながら、この独立には過酷な苦難と幾多の尊い民族の血が流れている。従って、この過程で結びついた信頼および友情ほど強固な『絆』は他にないと言っても過言ではない。

ビルマの独立宣言は1948年1月4日ではなく、1943年8月1日に行われた。過って

日本の南機関が、英国からの独立運動の中核となるミャンマー青年30人を日本に集め、武装蜂起に必要な軍事訓練を施した。

アウンサン=Aung San率いるこの独立の志士30名及びタイ駐在のミャンマー人と南機関の人々の両国混成で創立されたのがビルマ独立義勇軍（BIA）であった。BIA初代最高司令官が『鈴木将軍』であり、二代目が『アウンサン将軍』であった。*BIA = Burma Independence Army

このBIAが後にビルマ（現ミャンマー）独立の原動力になったのである。そして戦後、これら志士の中からビルマの首相などの高官を輩出しているのである。我が国とミャンマーとの『強い絆』はこれを原点としている。



Nay Pyi Taw の広大な軍事博物館

また、このBIAが1942年（昭和17年）8月ラングーン郊外ミンガラドン（現ヤンゴン空港地区）にビルマ幹部候補生隊を開設した。6ヶ月の教育期間で将校教育を実施し、終了者中、優秀な者を将校に、更に成績抜群な者が日本の陸軍士官学校へ留学生として、1943年～1944年にかけて合計70名が派遣された。

これら日本の陸士へ派遣された者も戦後、ミャンマーの重職に就き、日本とミャンマーの友好の絆を更に深めたこの事実は余り両国の間で知られていない。（後述）

一方、2011年末にミャンマーが民主化へ舵を切って以来、諸外国は挙ってアジア最後のフロンティアとして、或いは東南アジアの地政学的に重要な位置を占め、資源が豊かで、且つ人材の豊富なミャンマーへ競って進出している。我が国も然りである。そこで、今後の我国とミャンマーの一層の絆を深め更なる共生を願うために、今もって日本とミャンマー両国の深い絆の史実を記述する。

日本とビルマ（ミャンマー）との交流

● 御朱印船の時代

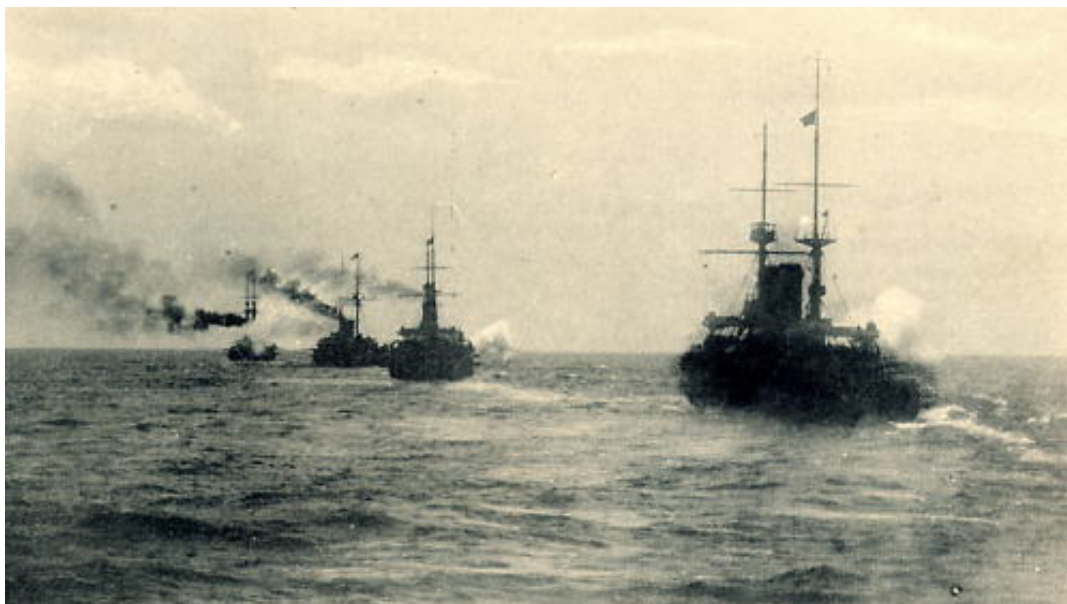


アラカン王国の一部遺跡

1600年代350隻以上の御朱印船がミャンマー、フィリピン、ジャワ、カンボジア等、東南アジア地域に渡り、各地に日本町（日本人居住地）がつくられるほど盛んに交易が行われた。元駐ミャンマー大使山口洋一氏の著書によれば、徳川幕府のキリシタン武士および信者の迫害や国外追放がしばしば行われたので、我国のキリシタン武士団がミ国アラカン王国へ渡り、親任を受け護衛隊長及び騎士団になっていた。一方、彼の有名な山田長政一族がシャム国（現タイ国）アユタヤ王朝時代に大名に登用されていたが、王朝の滅亡後に迫害を受け、ミ国シャン州に逃避し、今ではそれら多くの日本人が現地で同化しており、先祖を日本人に持つと言う末裔も少なからず見受けられている。

また、ミャンマー人は我が民族と同じく、モンゴリア斑点を持ち、同一人種起源による近似した性質以外に、日本人のDNAも少なからず混在していると思われる。従って、日本に近い思考、習慣、礼儀がミャンマーで見られるのも不思議ではない。

● 日露戦争勝利がアジアなどに及ぼした影響



1905年（明治38）年5月27日～28日の日本海海戦（旧日本海軍連合艦隊）

1905年日本がロシアに勝利したことにより、当時のアジア・アフリカ指導者達の回顧録に、『有色人種である小国日本が白人の大国に勝った』と言う前例のない事実が、植民地であったアジアやアフリカの人々に『自信と独立の意思を植え付けた』と記されるなど、悲惨な人種差別下の植民地時代における一種の光明を与える感慨深い記録が数多く見られる。以後、当時のアジア諸国から独立の意志を持つ人々が日本へ来日するようになっていた。

ビルマの独立運動と南機関

● ビルマのウ・オッタマ僧正の来日（1907年）



左端がウ・オッタマ僧正

彼は若いころイギリスに留学して、帰国後、抗英独立運動を唱えて投獄され出所後、小国日本が、超大国ロシアに、日露戦争で勝利を得たことに感動し、1907年（明治40年）、来日して日本全国を巡行した。奇遇にも『松坂屋 伊藤次郎左衛門』に会った。伊藤次郎左衛門は名古屋の豪商であり、ウ・オッタマ=U Ottamaを3年間、面倒を見て、妹まで日本に呼んだ。

次郎左衛門はオッタマを精神的にも、経済的にも支援した。オッタマはその間、日本を学び、日本の大学で仏教哲学も教えた。当時のビルマはイギリスの植民地であった。オッタマはその独立のために日本で学び日本で得た結論を『日本』という著書に集約した。その中で『日本の興隆と戦勝の真因は明治天皇を中心にして青年が団結して起ったからである。

我々も仏陀の教えを中心に青年が団結、決起すれば、必ず独立を勝ち取ることができる。』 『長年のイギリスの桎梏（しっこく）からのがれるには、日本に頼る以外に道はない』と主張した。この著書が、独立を志向するビルマ青年のバイブルとなり、1930年に『タキン党』（われらビルマ人党）が結成された。

このタキン党で学生運動のリーダーとして活躍したのがアウンサンやウ・ヌーらである。このタキン党の青年志士30人が後日、密出国して海南島など日本式軍事訓練を受け、大東亜戦争を日本軍と共に戦い、遂に独立を果たした。その主導者が上述している後のビルマ建国の父アウンサンで、現ミャンマー連邦共和国のアウンサン スーチー国家顧問は、このアウンサンの娘である。

● ビルマ独立の芽生え



ラングーン大学（現ヤンゴン大学） 校章は BIA の旗と同じ孔雀

ビルマ本国に於ける独立運動の芽生になった口火も、日露戦争で日本が勝利したことであった。所謂、白人、あるいはヨーロッパ諸国に対して、なかば諦めに近いコンプレックスを抱いていたビルマの青年が日本の勝利で目覚める結果となった。これは他のアジア諸国も同じであった。

1908年（明治41年）に青年仏教協会が結成され、これが独立運動の母体となった。1920年（大正9年）ラングーン（現ヤンゴン）大学生のストライキ。1924年（大正13年）マンダレー騒動。その後も各地に反英独立運動が頻発したが、いずれも英国官憲の手によって容赦なく鎮圧された。

しかし、1930年（昭和5年）イラワジデルタ地帯（ヤンゴン河口）で、ビルマにとって最重要な穀倉地帯に於いて大規模で終息困難な農民の騒動が起こった。こうした反英独立運動の指導的役割を果たしたのがタキン党と名のる人々と、ラングーン大学を中心とする学生達であった。

英国はこの様な情勢からビルマ独立運動をもはや抑え込むことは出来ないと考え、1935年（昭和10年）ビルマ統治法を制定し、ビルマをインドから分離して直轄領とした。そして、ついに1937年（昭和12年）、穏健進歩派であったバーモー氏を首班とする内閣（英国領ビルマ植民地政府首相）を発足させた。しかし、行政、立法、司法は依然として英国総督の手に握られており、内閣は補佐機関、即ち傀儡政権に過ぎなかった。

完全な独立を願うタキン党や学生達はビルマの商業や利権を握っていた反インド、反中国および全ての実権を握っていた反英国感情は日を追って高まり、タキン党を

中心として独立運動の波は激しくなる一方であった。

タキン党の中でもバーモー内閣に協力し独立を得ようとするグループとバーモー政権に反対し、完全な独立を進めるグループに分かれた。この急先鋒にタキン・コドメイン、タキンミヤに加えて、1936年の学生ストライキを指導した学生連盟のアウンサン、スー、サントンなどがいた。

1938年（昭和13年）11月のエナジョン油田労働者のストライキなど、その後も反英運動が激化し、英国官憲と衝突し、流血の惨事が続き、ビルマ全土のゼネストへ発展した。この結果、英国に政治的口実をとられバーモー内閣は1939年2月に瓦解してしまった。その後のウ・ブウ内閣もビルマ全土を治めることができず不安定な状態となっていた。

● 南機関の設立

1940年（昭和15年）3月にビルマルート（援蔣ルート）が開通した。ビルマ・ラングーン（現ヤンゴン）～マンダレー～ラシオを経て、中国の昆明～重慶に至るルートが開通し、蒋介石が率いる中国重慶政府へ英米が軍事物資を含む多大の援助を行なえるようになった。

このために膠着状態にあった支那事変の解決が一層困難になった。この様なおり、ドイツによりヨーロッパで戦争が始まり、1940年5月には英国、仏蘭西もドイツに宣戦を布告し、ここに第二次大戦が勃発した。

こうしたヨーロッパの情勢変化により、当時の日本政府（第二次近衛内閣）は同年7月26日の閣議で「基本国策要項」が決定され、翌27日「世界情勢の推移に伴う時局処理要項」が決定された。支那事変の解決に悩む政府と軍が、南方に活路を求めようとして、当時、次の最高方針を定めた。

『 — 帝国（日本）が英米依存の態勢より脱却し、日・満州・支那を骨幹とし、概ね印度（インド）以東豪州・ニュージーランド以北の南洋方面を一環とする自給態勢を確立するは、当面帝国の速急実現を要すべき所にして、是が達成の機会は、今日を措き他日に求むること極めて困難なるべし。 — 』そして、第1条から第4条まで決定された。これを受けて約6か月後に『南機関が設立』された。その概要、目的などは次の通りであった。

(1) その概要は「南機関外史」に次のように記載されている。

『南機関は其の発足進展途上に於いて、やや複雑性を有するも、之は正式に云えば昭和16年（1941年）2月1日大本営陸海軍部直属緬甸（ビルマ）工作機関として設立せられ、後、大本営海軍部の手を離れ、大東亜戦争勃興と共に南方軍総司令部に隷属し、次いで第15軍林1611部隊に配属せられたる特務機関なり』



南機関の（鈴木大佐機関長）

(2) 南機関の行動目的は次の通りあったと判断される。

『①大東亜共栄圏の樹立。②ビルマ援蔣ルート of 遮断。③日本の絶対防衛圏の堅持』

※大東亜共栄圏：Greater East Asia Co-prosperity Sphere＝植民地を解放し共存共栄の国際秩序建設。

(3) 他方、その行動実施計画の構想は次の通であった。

- a) 独立の中核となるべきビルマ青年30名を密かに国外に脱出させ、武装蜂起に必要な軍事訓練を施す。
- b) その後、彼らに武器、資金を与えてビルマに再潜入させ、武装蜂起を促し、国内各地で独立政府の樹立を宣言する。
- c) 南機関本部は当面は泰（タイ）に置く。
- d) 緬（ビルマ）国境沿いのタイ領内にビルマ青年を受け入れ、再投入する基地を設ける。』

● 鈴木機関長とアウンサンの来日

ビルマでは多くの活動家が英国官憲の手で投獄されることもあって、革新を求める急進派のアウンサン、タキンミヤなどが独立の主流となっていた。このグループは英国と戦い独立と自由を勝ち取るためには、武装蜂起が必要であり、このために武器と軍事訓練が必要であると判断し、外国の力を借りなければならぬと考えた。それが、たとえ日本であろうと支那であろうと、どこの国であっても構わなかった。タキン党の主流派は地下に潜って、外国勢力との接触をはかろうとして、英国官憲の追及が厳しいアウンサンなどを国外に脱出させ、まず支那と連絡をとる機会を伺っていた。



一方、ヨーロッパで戦雲が拡大する中で、日本が支那事変に手詰まりを感じて南方へ進出を決めるに至っていた。

南機関長である鈴木大佐はこうした緊張した情勢の中で1940年6月、日緬(ビルマ)協会書記兼読売新聞特派員「南益世」の偽名を使ってラングーン(現ヤンゴン)に入り、タキン党員と接触した。そこで鈴木大佐はアウンサンやタキンミヤを中心とする独立の指導者たちが第三国に援助を求めていることを大変に重要視した。彼らがソ連やドイツなどに援助を求めると南方に進出を企画している日本にとって不利になると判断し、何とかして彼らと接触しようと試みた。

鈴木大佐はタキン党の第一人者であるタキン・コンドマイン会い、熱心に日本が独立の支援をすることを説き、密約を結んだ。

これにより日本がビルマ民族運動支援の指導権を他国に先んじて握ることができ、鈴木大佐は9月にティモン博士からアウンサン及びラミヤンの写真を入手した。

二人は8月8日に英国官憲の追及を逃れ、苦力に変装しチャイナ・サイアムラインの客貨車船(海利号)に乗船して、厦門(アモイ)に向かっていた。鈴木大佐は帰

国途中、台北に寄り台湾軍の田中参謀を通じてアウンサンとラミヤンの写真を廈門の特務機関に送り、二人の確保と東京への護送を依頼した。

神田憲兵少佐によって、廈門国際租界の中国系旅館の食堂で二人を発見することができた。アウンサンもラミヤンも当初、日本に行く予定は持っていなかった。

この日本へ行くまでの経緯は今後の我が国にとっても参考になるから、その概略を特に記述する。

ビルマのタキン党は独立支援に関して中国共産党と何らかの協定を結んだが、その協定自体が不十分な内容であり、その後タキン党から同党に連絡をとるも徒労に帰した。そこで、タキン党はアウンサンに中国政府（重慶の国民党政権）と連絡をとることを決めたが、雨季で重慶に行く事ができず、英国官憲の追及が急なためにアウンサン達をビルマから海路廈門に脱出させた。

アウンサン達は廈門から必死に中国と連絡をとろうとしたが、不成功に終わり、絶望の淵にいるとき、神田少佐に発見されたのである。そして、二人は最初驚いていたが、ティモン博士よりの依頼と聞き安心して、日本行を承諾したのである。

当時の我が国とビルマ独立派の人々との間に、未だ信頼と友情が、確立していない段階では、ビルマにとって日本は単なる一支援国として存在しているにすぎなかった。

1940年（昭和15年）11月8日アウンサンたちは羽田飛行場に到着した。ところが日本の事情は未だ受け入れられる準備が出来ていなかったもので、飛行場から税関を通関するのも身分を明かすわけにはいかず、鈴木大佐は苦勞することになった。



鈴木大佐宅。左端がアウンサン、右がラミヤン

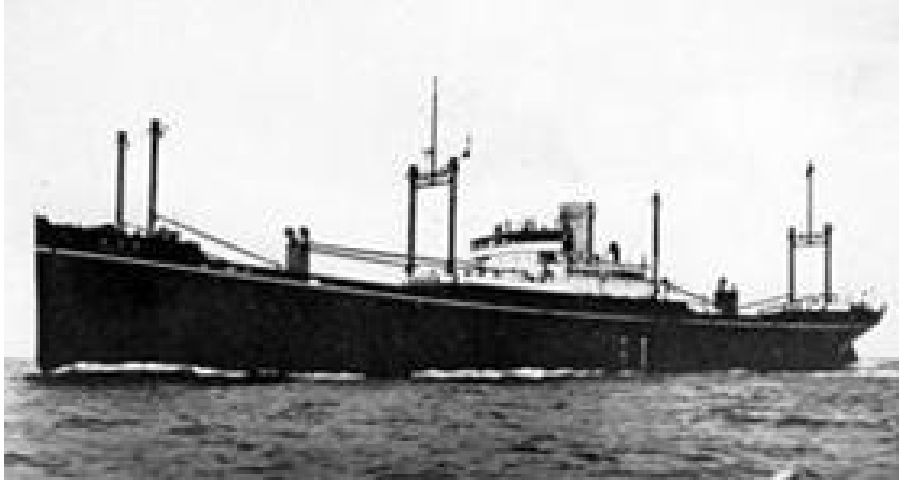
大佐は時を待たねばならないと思い、二人を連れて郷里の浜松に帰り自宅に一時秘匿した。しかし、その後も事情により浜名湖弁天島の小松屋旅館などと東京の宿と移動しながら、独立運動の構想を話し合ったのである。



浜松市で和服を着たアウンサン

独立準備の行動開始

● アウンサンへの作戦命令第一号



杉井氏とアウンサンが川崎港から乗船した春天丸

1940年11月にアウンサンとラミヤンが来日したおり、日本の大本営参謀部の対ビルマ計画が定まらず、半ば宙ぶらりんの態に置かれていたようであったが、しかし、それも僅かな期間だった。

翌年初めにビルマルート遮断の問題が緊急課題となったことで参謀本部側の南機関に与えられた最初の作戦行動は、数十人のビルマ人に軍事訓練を施し、軍事エリートを育成することであった。

ここで、ようやくにして、アウンサン達は陽の目をみるにいたった。

参考までに南機関長佐がアウンサンと杉井氏（アウンサンに同行）に発した作戦命令第一号の概略を列記する。

▼作戦命令第一号 昭和16年（1941年）2月14日 於駿台荘

1、貴官は春天丸の事務長として、明15日川崎を出帆、緬甸（ビルマ）に至り左記任務に服すべし。

- イ 面田紋二（アウンサン）の行動を指導援助す。
- ロ 革命党員の脱出を援助し且つ之を教育実施地に連行す。
- ハ 省略

二 緬甸に於ける新情報を募集す。

2、面田紋二（アウンサン）の行動は春天丸事務員として貴官と同行し緬甸（ビルマ）に至り、緬甸独立援助に関する諸計画に基づき、緬甸国内に於ける諸準備を指導し、為し得れば再び同船にて日本に帰還するものとする。

3、大野大佐に伝達すべき南機関命令別紙の如し。

註：大野大佐（在蘭貢（ラングーン=現ヤンゴン）総領事館 海軍予備役大佐）命令書に概要は次の通り。

貴官（大野予備役大佐）は南機関蘭貢（ラングーン）班長となり、緬甸独立党と南機関との連絡、独立党員の脱出指導と援助、諸経費の立替え、諸報告を大本営参謀本部（陸軍）及び軍令部（海軍総司令部）へ行うなどの内容。

4、日本帰還後に於ける行動は、参謀本部尾関大尉、又は、軍令部日高中佐の指示によるべし。

5、任務遂行中緊急を要する連絡は、前項指示官気付にて之を行うべし。

命令を受けたアウンサンたちは余りにも急激なことであり、面食らったこともあったが、何とか処理し、南機関長の指導で艀装の船員手帳を貰い、船員服に身を包み川崎港からビルマ米買付の大同海運春天丸に乗りこんだ。命令受領した翌日の2月15日未明、船は川崎港を出港しビルマにむかった。



現在のバセイン港

船はイラワジ河下流、米の積出港で有名なバセイン港に到着した。ビルマ脱出党員に渡すべき乗船の手配書、機密書類などを特殊用紙に書き写し、アウンサンは入れ歯である虫歯の穴に詰め、春天丸の機関長と船員2人と共にバナナを買う名目で税関の正門を突破し、林の中で素早くロンジ-を履いてビルマ人に返った。

機関長達はアウンサンが脱ぎ捨てた船員服を二重に着込み船に帰った。バセイン港を出港するとき、英国官憲が春天丸の船員点呼をしたが、全ての書類を1名減らしていたのでアウンサンの脱出、潜入は全く気付かれなかった。

ビルマ密航には薄氷を踏む場面もあったが、南機関員を中心とした両国の関係機関の全面協力のもと、アウンサンはタキン党の地下ルートなどを駆使し、有力メンバーとのコンタクトに成功。陸路・海路を経て日本に辿り着いたビルマ人青年は30人に上った。この30名が、後にビルマ独立の伝説に語られることになる「30人の志士」である。

日本に脱出したビルマ青年、概ね1941年（昭和16年）6月頃までに30名に達した。当時、日本は開戦前であり、これら工作の秘匿をはかるために、また軍事訓練のおり主に日本語を使用することもあって、彼ら30名は全て日本姓名を名乗っていた。これら30名のビルマ志士全員がこの日本名を持つようになったのも、ビルマの志士が一層日本色を色濃く持つようになった主要な原因である。彼らの日本名は両国で余り知られていないので、参考までに主な人物のみを紹介する。

- アウンサン=Aung San（面田）
- ボネウイン（元ビルマ首相）=Bo Ne Win（高杉）
- レヤ（元副総理）=Let Ya（谷）
- ボームーオン（元衆議院議長）=Bohmu Aung（大村）
- ポーミン（元国会議員）=Phone Myint（陳田）
- リンヨン（実業家）=Lin Yone（内海）
- セチャ（在日駐在武官、実業家）=Set Kya（平田）・・・

【軍事訓練】

当初、南機関はビルマ青年に台湾などで軍事訓練を施す予定であったが、彼らの軍事訓練を英国などの関係国に発見されると大きな国際問題になる。そのほか気候条件がビルマに似通っているという理由もあって結局、選ばれた訓練地は海南島南部、榆林港に隣接した人口2000人ばかりの日本海軍基地三亜の町から50キロ離れた密林の中だった。日本に集結した30人のビルマ青年は、箱根で東の間の静養を終えると1941年（昭和16年）4月頃から順次三亜訓練所に送り込まれた。



三亜での訓練光景、中央は日本軍教官

訓練班の基礎訓練は同じであったが教育目的によって次の三班に分かれていた。

- ①第一班は主として中隊長以下の実兵の指揮、兵員の訓練などができる指揮官の養成。
- ②第二班はゲリラ、謀略破壊活動の指揮官養成。
- ③第三班は予想作戦に対応する師団以下の運用ができる高級指揮官の養成。

訓練は全くの初歩段階から行わねばならなかった。何故なら、英国はビルマを統治する方法として、カレン民族などの少数民族のみに兵隊になる特権を与え、70%以上の大多数を占めるビルマ族に対しては一切の軍事面から遮断していた。

従って彼ら30名は独立の意識は立派であっても、軍事知識は皆無であった。

訓練内容は作戦要務令を中心とした各種戦闘の基礎、武器使用法、偵察法、謀略法、作戦法と図上演習などであった。

そのように軍事知識のない者を、通常であれば2年かかるところ、数カ月間で一人前にするのであるから、訓練は大変に厳しいものであった。

短期間の訓練で早期に習熟するために危険であったが、小銃、機関銃、手りゅう弾、小大口径の大砲などの実弾を使用し毎日が真剣勝負であった。

また、ジャングルの暑いまっただ中であったから、疲労も激しかった。ビルマの若い独立の志士たちは必死になって日本の教官についてきたが、疲労困憊し脱落しそうになると、さっそく怒声が飛ぶ。

「そんなことで英軍をビルマから追い出せるか！」

「そんな意志薄弱で独立が獲得できるか」

実際にこの訓練の教官を務めた泉谷陸軍中尉はつぎのように話している。

「私は今でも教官であった南機関のスタッフほど、ビルマ人のビルマ、ビルマ人の独立を純粋に願った人々はいないと思う」

そうしたビルマの独立を純粋に願う気持ちが、激しい訓練でのビルマの違和感などを二ヶ月、三ヶ月経つと30名の訓練生と教官たち間の距離を一気に埋めてしまった。夕食時、時として彼ら若いビルマの志士たちは今ビルマで進んでいる地下組織活動や武装蜂起の日の作戦に議論をわかせ、何時も”Daw Burma”のタキン党の歌を合唱し終了としていた。

ビルマ青年たちのリーダーはアウンサンが務めた。訓練用の武器には中国戦線などで捕獲した外国製の武器を準備するなどして、日本の関与が発覚しないよう細心の注意が払われた。グループに比較的遅れて加わった中にタキン・シュモンすなわちネ・ウィンがいた。ネ・ウィンは理解力に優れ、ひ弱そうに見える体格の内に凄まじい闘志を秘めていた。*ネ・ウィンはたちまち頭角を現し、オンサンの右腕を担うことになった。（*ネ・ウィンは後のビルマ大統領である。）

このようにして訓練を終え、1941年（昭和16年）10月5日に三亜訓練所を閉鎖し、訓練隊員は榆林港から台湾に向かった。

10月8日、台湾東海岸花蓮港に上陸、列車で玉里に向かった。ビルマの志士達は今までの偽装のための海軍服装から三亜訓練所をでるとき初めて陸軍幹部候補生の服装と階級章（兵長）を纏った。そのため玉里に着いたおり、町民の盛大な歓迎を受けたが、市民は誰ひとり疑う者はなかった。この後、彼ら一行は順次タイ国のバンコクへ移動していったのである。

ビルマ独立義勇軍（BIA）の誕生

● BIA の誕生と活動

1941年（昭和16年）12月8日、日本は太平洋戦争に突入した。これによって南機関の作戦計画をゲリラ戦、即ち「小規模な兵力による戦争方式。奇襲によって敵に損害を与え、援蒋ビルマルート（蒋介石政権）の補給路を遮断しながら、ビルマ独立を達成する」作戦方式から、「戦力規模を大きくし、我が国の南方正規軍と共同してビルマを独立さす」方式へ変更することにした。

そして、1941年（昭16年）12月28日タイ・バンコクの中華総商会庁舎に於いて、ビルマ（ミャンマー）の古い伝統的な儀式にのっとり『ビルマ独立義勇軍（Burma Independence Army, BIA）』の結成宣誓式が行われた。これが現在のミャンマー国軍の母体である。



アウンサン BIA 少将

この結成には、サイゴンから12月26日にバンコクへ到着していたアウンサン及び台湾から着いたばかりの独立の志士30名中27名とタイなどに居た約200名のビルマ人が参加した。日本人としては鈴木大佐以下、南機関員が中心となり74名の日本軍人及び軍属がBIAに参加している。文字通り、日・緬合同軍であった。

初代BIA軍司令官は南大将（鈴木大佐）、二代目の軍司令官がアウンサン将軍であった。

1. 司令部（ボーモージョー）		2. BIA主力（司令部と共に構造する）	
軍司令官	南大将（鈴木大佐）	前衛 隊長	北島大佐（高橋中尉）
参謀長	村上少将（野田大尉）	本隊 司令部	
高級参謀	面田少将（アウンサン）	親衛隊 隊長	大坪大佐（山本中尉）
参謀	糸田中佐（ラミヤン）	本隊 隊長	鈴木大佐（鈴木中尉）
参謀	平田中佐（オンタン）		谷口大尉（ボーチョーズ）
軍医長	鈴木少将（ドクター鈴木）	後続隊隊長	稲田中佐（稲田中尉）

この本体の他、③ダヴォイ兵団 ④メルギー支隊 ⑤水上（海軍）支隊 ⑥田中謀略班 ⑦ビルマ領内攪乱軍指導班《班長 高杉中佐（ボネウィン）戦後ビルマ首相》が組織された。



BIAの閲兵 隊旗は孔雀

アウンサンはビルマ独立義勇軍（BIA）の閲兵式で誇らしく次の訓示を行った。

《兵士諸君！本日誕生したビルマ独立義勇軍は、その兵力・装備・熟練度に関して、決して第一級の軍隊ではない。しかし、その精神力、独立のために命すら捧げようという強固な決意までを合わせて考えるならば、これはもう素晴らしい力を備えた軍隊であるといつて過言ではない》

BIA結成まえに南機関長（鈴木大佐）は戦争突入により、南機関及びBIAの態勢と作戦を従来のゲリラ戦主体から戦闘隊形へ変更するにあたり、配属先でありビルマへ

進駐する第15軍と打合せ、南機関長はBIAを編成して独自の作戦を展開する構想を提案した。但し、独立問題にふれなかった。結果は次の通りになった。

a) BIA=ビルマ独立義勇軍は徴兵、徴税、調達をしながらビルマへ進軍する。

BIAが自前で戦費を賄うことが現在の国軍が企業を運営して、少なからずの戦費を自身で確保する伝統になっている。

b) BIAの進撃経路も次のように決定された。

タイ国ラーヘンからメーシードを通り泰緬（タイ・ビルマ）国境を突破する日本軍第15軍主力と同じルートをBIAの主力が進む。



孔雀の隊旗を掲げてタイからビルマで進撃する BIA

ダヴォイ(現ダウエ)を攻略する第15軍の支隊にはBIAのダヴォイ兵団の一隊が参加し、ビクトリア・ポイントへ進撃する支隊にもBIAの一部兵力がつくことになった。

南機関長はBIAを日本軍の前衛又は先兵になることを第15軍に要請し了解を得ていた。また、ビルマ領に進撃したらBIAが徴発、徴税、徴兵することも軍から認証を貰っていた。準備を整えたビルマ独立義勇軍本部には高々と孔雀のビルマ国旗が掲げられ、機関長以下義勇軍の者は皆な一つの服装と階級章に溶け込んで、志気誠に盛んであった。

BIA鈴木軍司令官12月30日、各指揮官を集め、戦闘、警戒、徴兵及び訓練方法、占領地工作、資金調達、物資徴発、投降兵の扱い、武器調達などについて訓示した。翌31日には早くも水上軍の平山支隊が出発していった。

● ビルマへの武器・物資輸送

BIAダヴォイ兵団の泉谷大佐はビルマへの武器・物資輸送を以下の様に語っている。ダヴォイ兵団は約一個大隊（約1000人）分の食糧、各物資、武器（小銃1000挺、機関銃、重火器、弾薬など）をビルマに運び込まなければならない。タイ・バンコクからカチャブリを経て国境近くのタイ部落までは列車および自動車で輸送できたが、国境を超えビルマ領内への輸送にタイ国苦力などは二の足を踏んだ。どうしたものかと、困窮していた。

12月26日頃、服装はまちまちであり、腰にはビルマ刀をさした異様な姿であったが、しかし一様に左腕には孔雀マークのついたBIAの腕章をつけた一団が、このタイ側の国境の部落に突然現れた。我々の姿を見つけると「ドウヴァマー（万歳）」と叫んで走ってきた。そしてダヴォイを攻略していた川島兵団長からの書状をみせた。これよると1月19日にダヴォイは陥落したので、彼らはダヴォイ地区までそれら物資・武器を輸送するために派遣されたのであった。

ジャングルや山脈を越えてきたから、一同に一日休んで明日、それらを輸送するように頼むと、青年たちのリーダーは「No」という。「我々是一日も早く、兵器などをビルマの同志に届けなくてはならない。いま受領できれば、すぐ引き返す」といった。私達は皆、その言葉に多大の感激を受けた。いかにビルマ人が独立を望んでいるか、彼らの独立の情熱が如何に激しいか、私達はひしひしと肌で感じた。この日を境に、翌日から毎日毎日数十人のビルマ青年が数集団この部落にやってきた。集積されていた物資、武器・弾薬は瞬く間に運び去られた。

BIA のビルマ進撃

ビルマ進軍の主力は日本軍第15軍であり、ビルマ独立義勇軍BIAは発足当時200人足らずの“小さな軍隊”であったが、一世紀以上も英国によって武器を取り上げられていたビルマ人にとっては画期的な出来事だった。BIAは三隊に分かれて故国ビルマに兵を進めた。BIA主力は1942年（昭和17年）1月18日タイ国ラーヘンから行動を開始した。

土地勘に優るBIAは巧みなゲリラ戦術で敵残存兵力を粉砕。地元住民の全面協力もあって、1月下旬にはビルマ中央平原を流れるシットタン河に逸逸早く到達した。行軍の途上でビルマ人の志願兵は増え続け、このころの兵力は約2000人に膨れ上がっていた。将校役となっていた「三十人志士」メンバーが即席の軍事訓練を施しながら進撃したという。

時期的には前後するがBIA本隊は3月8日ラングーンからプロム（現ピー：Pyay）方面の鉄道を遮断し、豪州兵と交戦し、これを潰走させ。戦車を有する英印軍と激戦を敢行し、これを撃破。この戦闘でエモン少佐（Aye Maung 日本名 長野）などが戦死した。

● ビルマ領内攪乱軍指導班の活躍

後方攪乱、情報収集および兵員募集などの目的で、《高杉中佐（ボネウィン）戦後ビルマ首相》が率いるビルマ領内攪乱班は平、木迫BIA両少佐と共に兵員募集後の訓練に供するために、また後方攪乱に必要な武器、爆破材、貨幣、食糧などを携帯して1942年（昭和17年）1月14日タイ国ラーヘンを出発した。



左ボネウィン、右アウンサン

一行はインドシナ山脈を超え、国境のサルウィン河支流タウンジン河畔に到着した。ボネウインを初めビルマ志士たちは黒々と濁流するタウンジン河の急流に呆然となった。

比較的流れが遅く川幅が狭い（100m以上）所を見つけ、木迫少佐がロープをもって河に飛び込んだ。しかし、流れに押されて数度の失敗を繰り返した後、ようやく対岸に泳ぎ着き、ロープを渡し、全員が渡河を完了させた。

ここからはビルマ志士たちが活躍する番になった。彼らは早速ビルマ服装に衣替えし、武器、爆破材、貨幣を分配し、これが今生の別れになるかも知れないと思い、互いに水盃を交わし、一人ひと握手して、二人ずつ三班に分かれたビルマ志士達は密林の中に消えていった。以下”The Root of Revolution”の記述による。

* **The Roots of the Revolution** : 「A brief History of the Defense Services of the Union of Burma and the Ideals for which they stand / Dhaminika U Ba Than.」

彼等は英印軍と官憲の目を潜って、それぞれラングーン（現ヤンゴン）に向かった。その途中彼らは地下組織と連絡を取りながら進んだ。ラングーン陥落一ヶ月余り前の2月2日、日本軍主力が未だシッタン河付近で戦闘を交えているところに、早くもラングーンに入った。ボネウインらの到着がビルマの地下組織をどんなに勇気づけた事は、はかり知れないものがあった。



応募したB I A兵員の訓練光景、隊旗は孔雀

ボネウインらは早速ペゲー（現バゴ）に軍事訓練所を造り、各地区から、挙って集まった若者たちに軍事訓練を始めた。これらの訓練不十分な兵ではあったが、英印軍の背後を脅かすゲリラ活動を展開し日本軍が攻略する前に大いに活躍したのである。ボネウインのこの手腕が後に彼がビルマ首相になった大きな原因である。

● BIA ペゲー（現パゴ）入城

1942年(昭和17年)2月 ラングーンの東70キロに位置するペゲー(現パゴ=Pago)の町は、突然の恐怖に見舞われた。列をなして行進して来る兵団を一人の農民が郊外で見かけ、不穏な噂が急速に広まったのだ。

「ついに日本軍が来た…」

英国植民地政府の悪宣伝によって当時の日本軍は恐れられ、家々は固く門戸を閉ざした。夜が開けた頃、町に入ってきた兵団の叫ぶ声が町中に響き渡った。

「ドバマ (われらビルマ)、ドマバ、戦いは勝利だ」ビルマ語だった。

行進してきたのは日本軍ではなく、激戦を重ねてきたBIA（ビルマ独立義勇軍）の軍隊である。



BIA を歓迎するペゲー市民

『我々はビルマ独立義勇軍である。攻撃を加える為にやって来たのではない。平和な暮らしを守る為にやって来たのだ。』

恐怖に覆われていた町は一転して歓喜に包まれた。演説が行なわれた広場は群衆で埋め尽くされ、BIAは歓迎の嵐で迎えられた。英国植民地の桎梏から解き放たれた瞬間である。この時、旗を掲げて演説した隊長は、ボ・ソーオン（日本名 桂、後に戦死）。ビルマ独立史に大きな足跡を残す「三十人志士」の一人だ。数々の伝説と栄光に彩られた「ビルマ三十人志士」は、今も、そして永遠にビルマの英雄として語り継がれているのである。

● BIA ラングーン（現ヤンゴン）入城

3月7日英印軍はラングーンを放棄し脱出、3月8日日本軍第33師団がラングーン（現ヤンゴン）を占領した。次いでBIAも続々とラングーンへ入城した。このときBIAの兵力は約1万余まで増加していた。

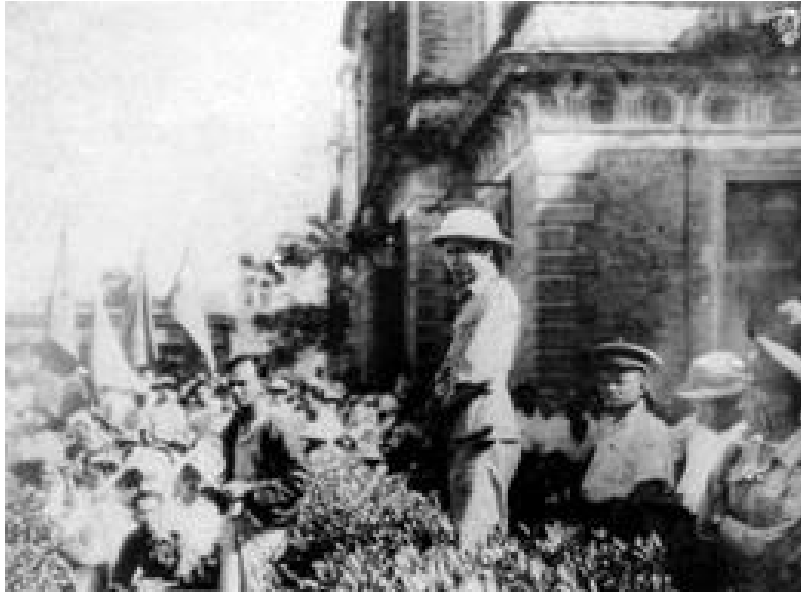


ラングーン市内を行進する BIA

3月25日、BIAはラングーン駅前の競技場で華々しい観兵式典を行った。オンサンを先頭にした4,500名のBIAの行進に、ラングーン市民は熱狂した。1941年末に200人規模で産声をあげたBIAはその時、兵員数3万人にのぼっていた。この行進中、BIA最高指揮官・鈴木敬司大佐は白装束を身に纏って登場する。鈴木大佐のBIA南大将での呼称はボ・モージョー（＝雷帝）であった。

ビルマ最後の王朝が英軍に倒された後、現地ではひとつの民間伝承が生まれた。それは「雷帝、東方より来たり、ビルマ族の解放をもたらす」というもので、BIAの進撃途中「雷帝来る」の噂は瞬く間に広がった。

一部の戦史家は、これを鈴木大佐の巧みな情報操作と断定している。しかし、南機関の主要メンバーだった泉谷達郎氏によれば、偶然の産物で、鈴木大佐が民衆の伝承を知ったのはビルマ進撃の途中だったという。また、その名付け親はアウンサンでもあった。現在に至っても、ミャンマーではボ・モージョー鈴木の名が知られ、尊敬の念を受け続けているのである。



馬上のBIA アウンサン高級参謀

● 平山水上支隊の活躍とビルマ海軍の創設

《水上支隊は我国が約30年前に建設したチャンギー（Kyankhin）セメント工場より更に上流まで遡行し、勇敢にも少人数で戦車約100両を擁する敵軍と激戦につぐ激戦を交えている》

平山水上支隊は1941年12月31日バンコクを出発して以来、ずっと独自の作戦を続けていた。ビルマ領南端ビクトリア・ポイントに進出した平山水上支隊は5隻を獲得して水上軍の形をとり、ビルマの人々の熱烈な応援をうけて、英印軍の後方攪乱および英政府下の警察をビルマ臨時政府の警察に切り替えながら、また、時には激しい戦闘をしながら、ビクトリア・ポイントからマレー半島の西海岸沿いに700キロ北上してアムハーストまで進出した。

他方、3月5日ベンガル湾ビヤポン最南部から海岸に沿って北上した平山水上支隊は、首都ラングーンの後背地にあたるデルタ地帯に危険な敵前上陸を大胆に敢行。その際、地元民の間に「日本軍数千名とビルマ義勇軍2,000名が攻撃準備中」との偽情報を流す。このために退路を遮断された。

思い、恐れをなした英軍は首都を放棄して撤退。結果的に、激烈な市街戦が行なわれることなく、昭和17年3月9日にラングーンは陥落した。

それを聞いた平山水上支隊長は直ちに、隊員を増員したBIAを率いて舟艇でイラワジ川本流を遡行し、途中、3月16日水上支隊は勇敢にもヘンサダ(現ヒンタダ=Hinthada)で密かに日本軍を挟撃しようとしていた英軍の虚を突いて攻撃した。

水上支隊の今村軍曹、ボヤナイン（Bo Yan Noing 日本名 山下）などの奮戦により敵を敗走させ、日本軍の窮地を救い、市を開放した。その後、デルタ地帯を約200kmも北上したプロム市（現ピエ市=Pyay）から南方13kmのシュエダウン（Swedaung）市に3月29日到達した。「戦車約100両を有した英軍がシュエダウン南方の道路上にあり、シュエダウン部落には相当数の英軍がいる」との情報を得た。本格的な装備をした敵であった。

平山水上支隊は33師団の佐藤大隊と連携して、この強敵を攻撃した。大変に激戦であって、彼我の距離が50mに迫る場合もあった。今村軍曹およびボヤナイン率いるBIAも勇敢に戦った。しかし、ついに平山水上支隊長は戦死するに至った。



1942年6月20日 ビルマ海軍創設。左端は南機関長（鈴木大佐）

この平山水上支隊は常に敵のさなかにあつて縦横無尽に戦った勇敢な行為は特記に値する。

これらの活躍が影響してか、南機関長（鈴木大佐）から命を受けた佐藤軍属が元英国海軍中尉だったマグ・テインなど英国海軍に在籍した30名を集め、1942年（昭和17年）6月20日に小さいながらもビルマ海軍が誕生した。その後、日本海軍の訓練を受けビルマの海岸線やデルタ地帯を警備する任務にあたった。これが現在のミャンマー海軍の母体になっている。

話は変わるが、我々ミャンマー鉄道支援の一行は、2015年（平成27年）2月22日、過去に我が国のODAで造られたチャンギー（Kyankhin）セメント工場の電気機関車、電気設備、線路などを見学するために同セメント工場に行った。

その際、工場近在のイラワジ湖畔で昼食をとりながら、雄大なイラワジに見とれて

いた。乾季であるから河の水量は減少していたが、河川用としては大きな遊覧船が遡上していた。いま記述しながら思うことは、BIAの平山水上支隊はこの位置を更に遠くまで遡上し、一途に心からビルマ独立を願い激戦に次ぐ激戦を重ね勇敢に戦っている姿が目に見え、同じミャンマーを支援する者として、何か共通した思いを不思議に抱いた。



チャンギーセメント工場近在のイラワジ河 2015.2.22、筆者撮影

● ビルマ（緬甸）幹部候補生の誕生と日本への留学

1942年6月、第15軍の飯田郡司令官は、ビルマ側が中央の指導者として認めていたバーモ博士に対して正式にビルマ中央政府機関設立準備委員会の発足を命じた。また、ビルマ平定の先が見える様にもなっていた。このような情勢の中でBIAを正式な軍隊に改編するべきとの風潮が高まっていた。

そこで、約30,000名に達していたBIAの中から3,000名の精鋭を選んでビルマ防衛軍（Burma Defense Army, BDA）に改編した。そして後述するように時同じくして、鈴木機関長に帰国命令が発せられたこともあり、BDAの軍司令官にアウンサン少将が任命されたのである。

このBDAの設置と並行して、8月にラングーン（現ヤンゴン）市の郊外ミンガラドン（現ヤンゴン空港地区）に《ビルマ（緬甸）幹部候補生隊》が開設された。

校長は南機関の川島元BIA中将（大尉）が就任し、隊長以下教官は全て日本軍将校と下士官であった。生徒の資格は16歳以上の年齢であって健康且つ学業優秀であり、出身地の有力者の推薦が必要であった。

教育は全て日本語で行われ、期間は6ヶ月で将校教育を実施し、終了者中、成績抜

群者は日本の陸軍士官学校に留学派遣され、成績優秀な者は将校に、他は下士官に任命された。大田周二著書によれば、1942年（昭和17年）10月22日付け朝日新聞はこの幹部候補生を取材して次の記事を掲載している。

《全ての号令が日本語であることはもちろん、申告も報告も全部日本語でテキパキとやってのけるばかりか、「海ゆかば」や「歩兵の歌」も朗々と歌ふ（中略）緑色の星章の戦闘帽をいただき緑色の線で縁どられた襟章の制服を着て見違えるばかりの元気な一等兵になっている。朝の点呼前の間稽古の銃剣術もすっかり板についた---。》

日本の陸軍士官学校へ留学した者は次の通であった。1943年（昭和18年）から1944年（昭和19年）の間で、歩兵科50名、砲兵科10名、航空科10名、計70名であった。

この「緬甸幹部候補生隊」は戦後メイミョウ（現ピンウーリン）に創設された「ミャンマー国軍士官学校」の母体となっている。

この緬甸幹部候補生は日本への留学組も入れて、戦後、ミャンマーの重鎮を占めており、ミャンマーが親日である原因にもなっている。また、巻頭に記したミャンマー-Yawataung工場の訓練生が朝の点呼時に日本語の号令をかけていたのも頷ける。



ビルマ防衛軍 BDA の募集ポスター

ビルマ独立解放の「陽」と「陰」

開戦当時、ビルマ民衆は日本軍を解放軍来ると解し、いたるところで歓迎し自発的に支援をも申し出た。日本軍が進撃中、深い山地の僻地部落に入っても住民は喜んで迎えて水や果物を差し出したりして大いに歓迎してくれた。

また、これから英印軍を撃破に行くに分かれれば、彼らは嬉々雀躍と道案内をしたり、渡河する場合も船を持って渡してくれた。

この様にビルマの人々と手を取り合って日本軍とBIAは次々とビルマの各都市を独立開放していった。

しかしながら、その解放後の市政のやり方によって、独立解放の結果がビルマ人にとって大きく異なるところになった。今後、我が国とミャンマー新政権との付き合い方及び支援方策の参考になると思うから以下に紹介する。

【BIAによるダヴォイ Tavoy（現ダーウエ Dawei）市の開放】—The Roots of Revolution—の記述による第15軍支隊とBIAによって、1942年1月19日ダヴォイが陥落するとBIAは直ちに市民たちによる「ダヴォイ（現ダーウエ）民政府」を樹立した。これは治安面にも非常な成功をもたらし、わずか二三日の内に市は安定した。



ダヴォイの住民はBIAを自由の軍隊として歓迎し、日本の軍隊を独立の同志であり、救世軍として親しみをもって迎えた。民政府は全力を挙げてBIAと日本軍に、軍資金、食糧、労力、必需品を供給した。

日本人はBIAの志願兵が物凄い勢いで集まるのですっかり驚いてしまった。地下独立組織がここまで能率よく組織化されているとは決して予想もしなかった。

➤ダヴォイTavoy（現ダーウェDawei）、Dawei Special Economic Zone（Dawei SEZ）
日本・メコン地域諸国首脳会議が2015年7月4日東京で開催され、日本政府はダーウェ経済特区開発への協力を正式に表明した。タイ・ミャンマーから日本に技術、資金面での支援が求められていた。東南アジアを結ぶ「南部経済回路」の生産、物流拠点になるであろう。このようにダーウェ（旧ダヴォイ）は我が国と誠に不思議な縁で結ばれているようだ。

● 旧日本軍によるモールメン（現モウラミヤイン）市開放の失敗

1942年1月30日モールメンは旧日本軍によって陥落した。BIAの泉谷大佐（中尉）「ビルマ独立秘史の著者」が解放後のモールメン市に到着して見ると、市街は予想以上に静寂で活気が見られなかった。ダヴォイ同様に臨時政府が組織され、活発に活動しているものと考えていたが、その期待は裏切られた……。

市に駐在していたBIAの塔本中佐は残念そうに、モールメインの状況を語ってくれた。同市は1月30日に陥落したが日本軍（五十五師団）の司令部はこの市に日本の軍政を布き、BIA及び南機関の活動を封じ、モールメン地区のタキン党幹部（ビルマ解放）たちも敬遠してしまった。これでは日本軍による植民地政策にも等しく、何のために日・緬兵士の犠牲を払って開放したのかわからない。

The Roots of the Revolutionの記述より

【……モールメインに於けるビルマ人民政府の樹立は日本軍（五十五師団）によって巧妙に拒絶された。日本軍はビルマ領内に入れば直ちにビルマの独立を宣言すると、ビルマ民衆に撒いた宣伝文にもうたっていたではないか。

1月21日には東条首相が帝国会議で、『今後、フィリッピン、ビルマの民衆が日本の意図を真に理解し、協力を惜しまなければ、日本は喜んで独立を与える』と言う趣旨の演説を行った。ビルマ人による独立は何時なのかと、日本軍に詰問してもあやふやな返事しか返ってこない。】

このモールメンの件でビルマ人は日本軍に対する最初の幻滅を味わっていた。日本軍はモールメンに軍政を布いたことを作戦上当然と思い、気にもとめていなかった

が、このモールメンの不信はビルマ人の心にあとあとまで長く尾を引き、後に非常に大きな影響を与えることになった。

以上の2例は今後の我国とミャンマーとの共生及び支援の在り方に対して参考にするべき価値があると考えられる。



BIA 孔雀の隊旗

その後の日本軍とビルマの推移

● 日本軍とミ国軍の亀裂

1942年5月末までに日本軍はビルマ全域を制圧した。この間、ビルマへの独立付与をめぐって、南方軍および第15軍と南機関との間に対立が生じていた。日本はビルマ国内平定後、概ね独立をBIAに約束していた。そこで、鈴木大佐は日一日も早くビルマ独立政府を作り上げることを念願とし、アウンサンたちも、ビルマを平定さえすれば当然に独立は達成されるであろうと期待していた。

ところが、南方軍および第15軍の意向は、彼らの願いを根底から覆すものであった。鈴木大佐以下南機関のメンバーたちと次南方軍などとの間で次第に亀裂が生じていった。アウンサンたちも日本軍を不信視し、不満の念を高めていった。

● ビルマ軍の蜂起

紙面の都合で詳細説明を省略させて頂くが、その後、日本が傀儡政権を作ったこと、インパール作戦の失敗に端を発した日本軍の壊滅的な敗退、また、軍高級幹部の責任放棄などもあって、ビルマの民心は日本から離反していった。1944年8月、BNA、ビルマ共産党、人民革命党などによって抗日運動の秘密組織である「反ファシスト人民自由連盟」(AFPFL)が結成された。

※BNAビルマ国民軍 (Burma National Army) は1943年 (昭和18年) 8月BDAからBNAに改編された。

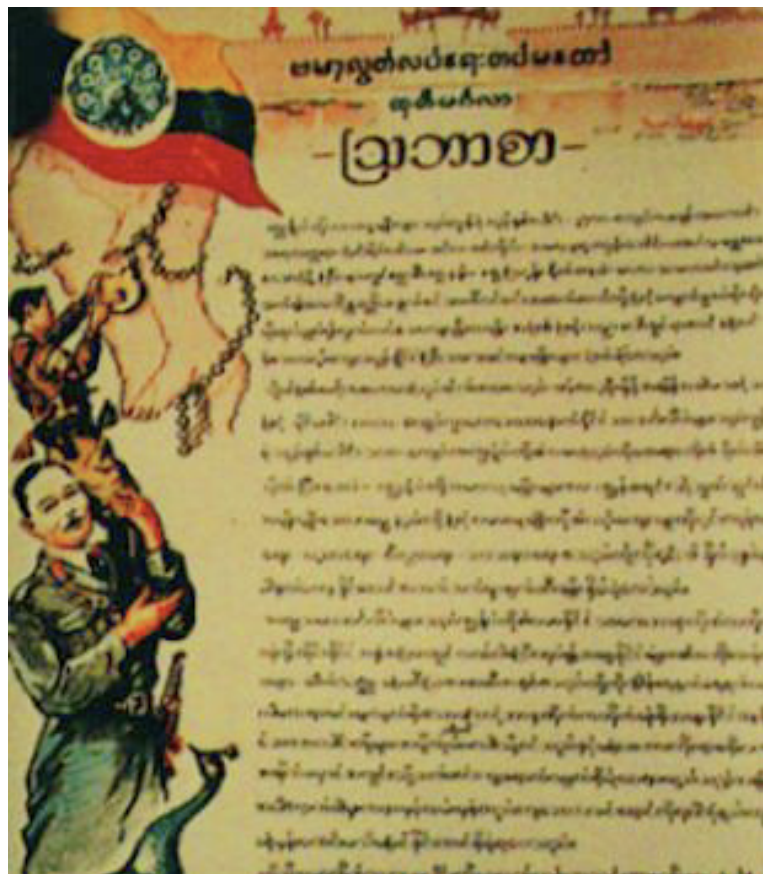
1945年3月27日、BNAはアウンサンの指導の下にビルマ全土で蜂起し、日本軍と交戦を交えるに至った。このとき「30人の志士」の1人ボ・ミンオン (日本名 河野) は義を立てて自決したと伝えられている。

● ビルマ軍蜂起に対するオンサン及びビルマ軍が示した真意

決起直前にアウンサンはバー・モウ首相 (戦時中のビルマ政府) に長い手紙を書いた。そこには、こう綴られていた。

【私には日本人を責める気持ちはありません。(略) 貴兄には今は理解しかねるかも知れません。でも信じ下さい。しばらくすれば私の真意がどこにあったか、判って頂けるでしょう】と。

国軍が反旗を翻す前の昭和17年7月14日ビルマを去ることになった南機関長 鈴木大佐にビルマ国軍アウンサン司令官から感謝状が手渡された。感謝状には鈴木大佐がビルマ兵を抱き上げ、鉄の鎖を解くイラストが添えられている。そして、文面には、ビルマ語で次の内容が記されていた。



南大佐への感謝状

《父親が子供に教え諭すがごとく、その子供を守るがごとく、雷（鈴木）将軍は真の愛情をもって、ビルマ独立義勇軍の兵士全員を教え、全員を庇い、全員のことに心を砕いてくれた。ビルマ人は、その老若男女を問わず、このことを忘れることは決してない。・・・ビルのためにこのような骨おりをした雷は、いまや日本に帰らんとしている。我々は、ビルマ独立軍の父、ビルマ独立軍の庇護者、ビルマ独立軍の恩人を末永く懐かしむ。・・・。将軍のビルマ国への貢献をいつまでも感謝します。たとえ世界が亡ぶとも、我々の感謝の気持が亡ぶことはない》

その時、旧南機関のメンバーで唯一人、高橋八郎中尉がビルマ国軍顧問として残っていたが、アウンサンは救命指示を出している。武装解除を行なった「三十人志士」の1人ボ・ゼヤ（日本名 加賀）は沈痛な面持ちで、高橋中尉に、こう語りかけた。

《我々は不本意ながら反乱を決意しました。あなたには済まないと思っています。…どうか我々の苦衷もご理解して下さい。（The Roots of the Revolution 230頁）》

● ビルマの独立とオンサン死去



アウンサン将軍夫妻、左端（母親腕の中）が現アウンサンスーチ国家顧問

1945年5月アウンサンは連合軍のルイス・マウントバッテン司令官と会談し、BNAがビルマ愛国軍（Patriot Burmese Forces, PBF）に改称した上で連合軍の指揮下に入ることで合意した。その後オンサンは軍を去ってAFPFL総裁に就任し、英国政府との交渉をはじめとする独立問題に専念することになった。しかし、アウンサンは1947年7月に暗殺され、1948年1月4日、ビルマはウ・ヌーを首班として独立を達成した。

1962年3月2日、ビルマ軍はクーデターを決行し、司令官ボ・ネウィン（日本名 高杉、30人の志士が大統領に就任した。

ボ・ネウインの率いる軍事政権は議会制民主主義を否定して「ビルマ式社会主義」を打ち出しが、経済政策の致命的な失敗に伴って、ボ・ネウインは1988年の民主化要求デモの責任を取って辞任した。この時、国民民主連盟（NLD:National League for Democracy, NLD）が設立された。

NLDは国軍から離別した旧軍人、共産党員及び旧政治家の三グループから構成されており、アウンジ元准将（会長）、ティン・ウー元大将（副会長）、アウンサンスーチ女史（書記長）で組織されていたが、スーチー氏がラジカルな形状学的な民主主

義を共産党グループと主張し国軍と対峙したために、NLD結党後、約半年でアウン
ジ元准将（会長）などの元軍人は離党してしまい、以後、更に国軍敵視を新たに
していった。国軍もスーチー女史を軟禁するなど非人道的な行為をするなど、双方に
抜き差しならぬ感情の嫌悪感が増長していった。

これが2021年2月1日の国軍によるクーデターに繋がってしまった。

参 考

● アウンサン勲章の授与

アウンサンは現在に至っても建国の父として大変に尊敬を受けている。彼は日本軍に心ならずとも1945年3月27日に反旗を翻したが、終戦後、英軍は見せしめの為にビルマ戦線に関わった旧日本軍人を相次いで連行した。

鈴木敬司少将も戦犯容疑でラングーン刑務所に収監されたが、アウンサンらは「ビルマ独立の恩人を裁判にかけるとは何事か」と猛反対し、彼らを釈放させることに成功した。

アウンサンの後継者で30人の志士であったネ・ウイン大統領はビルマ軍事政権を代表して、ビルマの第33回目の独立記念日に当たる1981年1月4日、ビルマ独立に貢献した7名の日本人に対して感謝の意を表し「アウン・サン勲章」を授与した。

その7名とは鈴木敬司氏未亡人、杉井満、川島威伸、泉谷達達郎、高橋八郎、赤井（旧姓鈴木）八郎、水谷伊那雄の各氏で、全員が南機関関係者であった。



● アウンサンスーチー国家顧問の来歴

アウンサンスーチー（Aung San Suu Kyi）女史は2016年4月1日に発足したミャンマー連邦共和国の国家顧問であって、ビルマ独立の父であるアウン・サン将軍の実娘である。また、現在、国民民主連盟（National League for Democracy, NLD）中央執行委員会議長を務める非暴力民主化運動の指導者および政治家である、1991年にノーベル平和賞受賞している。



スーチー女史はビルマ族であり、敬虔な上座仏教徒である。使用言語はビルマ語、英語、フランス語、日本語。インドのデリー大学及び英国オックスフォード大学で哲学、政治学、経済学の学士号を取得。

また父の研究をするため、オックスフォード大学で2年間かけ日本語を習得。1985年～86年にかけて京都大学東南アジア研究所の客員研究者として滞在し、大日本帝国軍関係者への聞き取り調査や、外務省外交史料館、旧防衛庁戦史部、国会図書館などでの資料調査を行い、父アウンサン将軍についての歴史研究を進行している。

職歴はロンドン大学東洋アフリカ研究所の助手及び国際連合事務局の書記官補を勤めていた。1972年にオックスフォードの後輩で、当時ブータン在住だったチベット研究者のマイケル・アリス（1946-1999）と結婚し、国際連合事務局を退職し、専業主婦となった。

1990年5月の総選挙でNLDが80%を超える議席を獲得し大勝した。しかし、タンシュエ議長率いる軍政側は「民主化より国の安全を優先する」と権力の移譲を拒否した。その後、スーチー女史は一貫して民主化を訴えたが自宅やインセン刑務所に幽閉された。その後、時を経て2011年3月30日ティンセイン大統領になり、ミャンマーは民主化に舵を切り、2015年11月8日の総選挙でスーチー率いるNLDが連邦議会の8割の議席を獲得する大勝利を収めた。そして2016年4月1日にアウンサンスーチーを首班（国家顧問）とする新政権を発足させた。

● ミャンマーの近代民主国家の雛型（バガン）

殆ど知られていないが、11世紀ころにミャンマーでは既に近代民主集団（国家）の雛型と言える王朝が出現していた。

ミャンマーの新政権は今後益々民主化を進めて行くであろう。今後ミャンマーの進展を推理するためにも、11世紀のミャンマーに現れた近代国家の雛型と思える社会集団に関して述べるのも価値があると思うので、以下に紹介する。

この11世紀の時代、ヨーロッパでは東ローマ帝国が全盛期時代であり、東アジアでは北宋の時代、日本は平安時代の中期にあたりであって摂関政治が全盛期を極めていた。世界いずれの国家に於いても、所謂、封建社会 乃至 奴隷社会に近い社会形態の時代であった。しかし、その当時としては予測もつかない近代社会の前衛がこのミャンマーの地に出来ていたことは驚きであると言っても過言ではないと思う。

2015年10月18日NHKは女優の”杏さん”のコーディネーターでアジア巨大遺跡「ミャンマーバガン（Bagan）遺跡」を以下の如く放映した。

ご存知の通り、バガンはカンボジアのアンコール・ワットやインドネシアのボロブドゥールとともに「世界の三大仏教遺跡」に数えられている。ミャンマーのバガン王朝は1044年に初めてバガン一体を統一し、11世紀から13世紀に栄えたミャンマー最初の王朝であった。最初のバガン王朝はアノーヤーター王朝であり、それまで乱れていた社会を武力で統制するのではなく、仏教を布教することを社会の倫理・規範とし、社会を構築すると言う謂わば、民主的な政治形態をとった。



バガンの遺跡群

それによって仏教はバガンで深い信仰の対象となり、王を始め人々の多くは敬虔な仏教徒となり、バガン王朝は大変に栄えた。

長いバガン王朝の中で建立されたパゴダや寺院の数は5000基を超えるとも伝えられているが、現在は3000基弱が残存している。有力な歴代のバガン王朝と雖も、各王朝で5000基ものパゴダなどを建てることは不可能であった。王朝が建立したと思われる数は凡そ30基と言われている。では、どうして、誰が5000基ものそれらを造ったのであろうか。

仏教の考えが広まると、人々は盗みをしない、人を殺さないなど正しい行いをするようになっていった。王たちにとっては権力を背景にした命令で民衆を統制するより、人々が信仰を守って正しく生きる方が、人心が安定し社会（王国）も繁栄するという考えになっていった。

バガン王朝は周辺国への遠征、下部ビルマの平定など軍事にも長けていた。また、民衆の人心も安定していったので、内政にも傾注できたから、治水、灌漑、用地開拓などに力を注いだ。従って、王朝も民衆も経済的には豊かであった。

民衆は社会で生活するために国家を治めるバガン王朝へ納税する。王は仏教を社会の倫理として深く信仰したから、その功德としてパゴダおよび寺院などを寄進した。ここで特記すべきは、裕福な王がこのパゴダ建設のための労働力として用いた民衆に強制労働を強いるのではなく、対価を物および賃金で支払った。従って民衆の中で財を蓄えた者も存在するようになった。彼らも敬虔な仏教徒であったから、功德としてパゴダを寄進していった。

このようにして、ビルマ平原に巨大な仏教社会が形成され、今なお3000ものパゴダや寺院が遺跡として残存しているのである。11世紀に出現したバガン王朝は「権力」によるのではなく、仏教という倫理で社会を治め、民衆が収入を得て生活をし、国家を形成及び保存するために納税をするという社会システムは「近代民主国家の雛型」と称しても差支えがないと判断される。

世界が封建社会、乃至、奴隷社会の全盛期であった時代にこのような近代民主社会が形成されていたのは、驚きであるとともに、仏教哲学を主軸としてバガン近代集団社会を形成出現させたことは、今後のミャンマーの進むべき道標と自信に繋がるのではないかと思う。

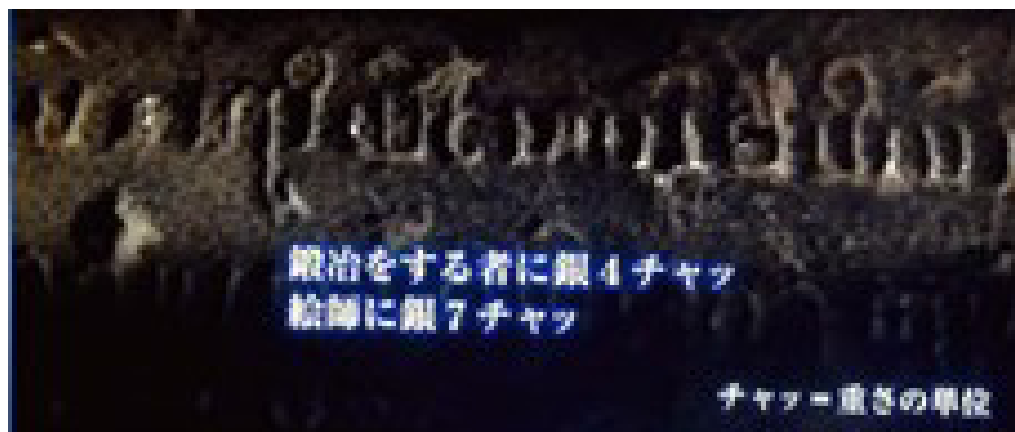
※1) 王がパゴダおよび寺院建設に支払った対価が遺跡からその痕跡が最近明らかにされている。

物で支払 : 労働者にモミ米1867バスケット、パソ（男性用衣類）113枚。
賃金支払 : 左官に銀2チャツ、絵師に銀7チャツ、鍛冶工に銀4チャツ、仏師に銀20チャツ。

チャツ=重さの単位

※2) 愛知大学の伊東利勝教授はミャンマーの考古学者と共同でバガン遺跡の発掘を行い。当時のバガン王朝はパゴダ建設で働いた労働者に上述の賃金を支払っていたとの根拠を発掘しています。

伊東教授は。バガンには庶民がパゴダや寺院の建設を可能とする社会的仕組みがあったと主張している。



「鍛冶をする人の銀4チャツ、絵師に銀7チャツ」と石板に彫ってある。(支払い伝票?)
(NHK2015年10月18日報道による。)

おわり

大東亜共栄圏の旗を高く掲げ、ビルマを英国による桎梏の鉄鎖から解放し独立を勝ち取ることを主要な目的とした日本の南機関の人々とアウンサンが率いるビルマ独立のためには生命も厭わない独立の志士30名が母体となり、1941年12月28日にビルマ独立義勇軍（BIA）が結成された。

初代の司令官は南機関長の鈴木大佐であり、ミャンマー独立の父アウンサンは高級参謀になり、その後、第二代目の司令官になった。一国の独立は容易に為し得ない。日・緬共同で創設されたビルマ独立義勇軍は意気高く独立の理想のために突き進んでいった。ビルマ民衆はそれを喜んで迎えあらゆる支援をした。それら日・緬共同の独立解放活動が燎原の火の如く広がり、ついに全土にひろがり、ビルマは独立を勝ち得た。ここで生死を乗り越え結び付いた日本とビルマの信頼と友情は誠に強固な絆となっていた。これが日本とミャンマーの親しい結びつきの原因であり、現在に至ってもつづいているのである。



バスのドアに貼られたアウンサン親子のポスター

水は高き所から低き所へ流れる如く、人類が造った歴史もまた紆余曲折があっても大衆が望む方向へ進んでいる。

20世紀は科学、工業などが大きく進歩した時代であった。しかしこの反面、社会はラクビーのボールの如く歪になってしまった。この21世紀後半はその歪を是正しながら社会を進歩してさせていく時代になるであろう。これもまた歴史の自然の流れ

であると思う。

とき恰も、ミャンマー民衆の豊かで幸福な社会を造るために民主化を一途に願うアウンサンスーチー女史(BIAアウンサンの実娘)が率いるNLDがミャンマー総選挙で、水が流れる如く、大多数の民衆の支持を得て圧倒的な勝利を得て、2016年4月1日に新政権を発足させた。

我が国は平和と共存を外交方針とし、法を重んじる国家である。この理念は根本に於いてビルマ独立義勇軍を母体となった南機関の考え方と類似している。

このように推理し判断すれば、今後、我々が、我が国と発足したミャンマー新政権との更なる共生を推進するために、ビルマ独立義勇軍の航跡を振り返ってみるのも価値があると思い、今回この拙文を記述した次第である。

海外国との共生はそう簡単に確立できるものではない。それぞれの国は自国が有利に展開する行動を優先するであろう。

両国に於ける事業展開および支援により、それらが双方国の発展に貢献し、その結果、水が自然に流れ込むが如く双方国の国益に繋がるようにすべきある。従って、それら全体を見通した《戦略》を策定しこれによって活動することが肝要と思う。

この事は両国間に於ける企業間に対しても同様であると判断される

末尾になったが、記述内容を可能な限り正確な史実にしたいために、下記に示す機関関係員でありビルマ独立義勇軍のダヴォイ兵団長で参謀長であられた泉谷氏著作(その名は南謀略機関)などの参考文献から少々引用させて頂いた。(終わり)

2016年5月10日 高松重信

参考文献

泉谷達郎著『ビルマ独立秘史(その名は南謀略機関)』1-238頁、徳間書店、1967年5月

大田周二著『パゴダの国のサムライたち』1-247頁、同朋舎、1997年8月

山口洋一著『ミャンマーの実像』1-357頁、勁草書房、1998年8月

筆者略歴

たかまつしげのぶ

高松重信



1942年生まれ。1967年国鉄入社、本社及び松任工場長、吹田工場長などを経て、民間会社の海外鉄道車両関係に従事。台湾に約5年6か月・電車の現地生産・責任者として駐在。

ミャンマーとの関係は1982年国鉄からビルマ国鉄へ派遣、いらい現在に至るまでミャンマー鉄道省運輸省及び同国鉄へ顧問的な指導。鉄道に関する論文発表多数。

元国土交通省ミャンマー鉄道改善WGのメンバー。2022年8月外務大臣表彰受賞。現(一社)日本ミャンマー友好協会(副会長)。現JICAミャンマー鉄道政策&技術顧問。

日緬ライブラリー・パダウ 2

嘗てのビルマ戦線で戦った日本将兵を想う
〈その1〉一日・緬の絆とビルマ独立義勇軍―

高松重信 著

2024年12月1日 発行

発行者：一般社団法人日本ミャンマー友好協会

〒160-0012

東京都新宿区南元町13-3-504 ライオンズマンション信濃町5F

TEL 03-6380-0409

ISBN 978-4-911475-01-0 C1820

©高松重信 2024